

資料5 邸宅での過ごし方に関する引用文献

旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）[凡例]  : 現存する建物

年代	旧滄浪閣（伊藤邸跡・旧李王家別邸）		
	所有	使われ方	建物・庭の様子
明治 29	伊藤博文 本邸	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実際公の此処に居住せるは頗る稀 (3) ・ 会々病魔に犯され、病養の為、不得已帰臥する外は、殆ど全く心気転換の目的にて帰来し、2、3日乃至5、6日滞在するのみ (3) ・ 人を避けて、静に特種の問題を攻究熟慮せんが為に来れるなり。要するに公の大磯に帰るや其短き滞在を利用して、最も多く精神上の慰安を得、最も良く肉体上の保養を為さんことを期したる。(3) ・ 此夫人の庭を掃き、室を清めて博文の帰来を待つあり。(3) ・ 老夫婦相対して閑談することあり・・中略・・晩酌を傾けつつ、互に波瀾重畳たる過去の経歴を語り出づることあり (3) ・ 昼となく夜となく、時々興到る毎に、座右の名刀を取り、鞘を拂ひ、明煌々たる刀身を凝視しつつ、独り微笑したる (3) ・ 囲碁も亦滄浪閣裏清興の一として、特記すべきものなり。・・略・・公の囲碁は一の精神休養にして、公は之が為めに特に能力を費さず (3) ・ 冬は日受宜き階下南向の一室に、藤の安楽椅子に寄り、夏は階上の風通し宜き場所を選び、長椅子に其身を横へ、書棚を閲する日本服着流しの公を見るを得べし。(3) ・ 居間といふのは、極近頃の建築になった西洋館で、未だ碌々その室内粧飾も完備せぬ位なのに、侯爵は安楽椅子を据えて、寝転びながら読書に耽って居られる。(4) ・ 伊藤博文が毎朝神を供え、中の円座に座って考え事をするが多かった。(5) ・ 伊藤は大磯の海岸をよく歩いたが、散歩の際も少数のお供だけを連れるのが常であった。(5) ・ 直ちに兒孫と相携えて、林間に松露を探り、庭池に釣糸を垂るるの楽すら有したり (3) ・ 漁夫を邸前の松林に集め、酒盛り、歓談 (5) ・ 公私・内外の訪問客が充満し、特に晩年は多かった。(2) ・ 町の主な人々を「滄浪閣」に招いて、梅子夫人と共に接待した。(2) ・ 夫人も此処に起居し、北堂も此処に其晩年を楽しみ、家財も凡て此処に所蔵せられ、吉凶の式典共に此処に行はれたり (3) ・ 午餐の時は公爵一家及其近親の外、時として坐に国家の元勳あり、当局の大臣あり、在野党の首領あり、当代の富豪あり、著名の文士あり、貴紳の婦人令嬢あり、俳優旗亭の女將と雖、苟も其名の当世に顕れたる者は、公と卓を共にするを得せしめれば、談話の多趣味なる、宛然盛大なる倶楽部の、食堂に在るの思あらしめたり (3) ・ 山縣大將が来訪せられて公爵と共に楼上に行かれた・・略・・また楼上に入れば、侯爵は某少將と碁を囲み居らるる傍に、大將は安楽椅子に寄って、それを眺めて評して居られた (4) ・ 就中西園寺候は、滄浪閣の西隣数歩の間に、来れ以って日夜公と往来して清談を事とせり。山縣公も會々其別墅小濁庵に来れば、固より公と相往復せり。樺山伯、高島子、故橋本子、加藤高明其他の諸星も時々公を来訪せり。故岩崎彌之助男、高田慎蔵、村井吉兵衛等の富豪も、時々公を午餐晚餐に招けり。(2) ・ 李垠（李王家）との交流 (2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 滄浪閣完成（西洋館は後の増築） (10) ・ 滄浪閣を本邸とする (5) ・ 侯爵邸の門は黒塗りで、二三軒の続き長屋があり、武者窓もあって、一見昔風の構造で、大名のお下屋敷といふ態がある、門を入れれば石の段もあり、又小門もある (4) ・ 西洋館：伊藤の居間、書斎、来賓の応接室、接待室などの公的な機能 (5) ・ 和館：主に居宅。母琴子や妻梅子が起居する。梅子夫人の療養。(5) ・ 西の間：伊藤博文の父十蔵と母琴子の肖像が掲げられていた。(5) ・ 前略・・一詩は、滄浪閣内新に洋風の書斎を建築した際、公自ら其壁上に題したるものなり。(3) ・ 滄浪閣の楼上より富士山を望めば白扇倒に東海の天に懸って、侯に一筆讀を請ひたい程の絶景 (4) ・ 梅林の中に「四賢堂」を作り、東西の両壁に四人の肖像を高く掲げた (5) ・ 庭に梅子夫人の広い温室を建てる (9) ・ 室内は花紋ある絨毯で敷き詰め、卓子あり、唐机あり、椅子あり、坐布團あり、屏風は土佐光起の極彩色の花鳥と、頼三樹の一双の書とが、立ててある。(4) ・ 壁間の大書幅は、これもこの閣に縁のある滄浪に足を洗ふ図を、宋末か、明朝頃の人の書いたので、筆力頗る雄健だ、その次の上段の間には一層の大きい書幅が懸けてある・・略・・この座敷の廣いだけが、この書の妙も真価も判る (4) ・ 扁額ある一室に於て又茗を煮て饗せらる。その室の模様を見るに正面の扁額は彼の李鴻章が、馬関講和条約後、帰国して直ちに侯に贈りしもの (4)
明治 42	家伊藤 邸	<ul style="list-style-type: none"> ・ 伊藤博文暗殺後、梅子夫人が居住 (2) ・ 梅子夫人と李垠が共に写る写真が残る (5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四賢堂に伊藤を祀り、「五賢堂」とし、庭の隅に移動 (5)
大正 10	別李王家 邸	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「滄浪閣」は伊藤の暗殺後、梅子夫人の住居になっていたが、のちに梅子は、李王世子（李垠）に献じた (2) 	
大正 12		<ul style="list-style-type: none"> ・ 伊藤時代と同じく「滄浪閣」と呼称 (5) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 関東大震災で倒壊 (2)
昭和元			<ul style="list-style-type: none"> ・ 旧材を利用し再建（設計者：中村與資平 施工者：多田工務店）(1)
昭和 20	GHQ	<ul style="list-style-type: none"> ・ GHQへ接収 (6) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 戦時中に入り込んだ軍隊が、百数十本の老松を伐り倒した。陣地構築のために伏り倒した木は、結局うやむやに拋棄された。(6)
昭和 21	榑橋渡 別邸	<ul style="list-style-type: none"> ・ 李王家から当時法制局長官であった榑橋がこの建物を使用してはどうかという申し入れがあった。伊藤公が明治憲法を構想したゆかりの邸宅であるから、新しい憲法を構想するのにちょうど恰好ではないかというので、その申し入れをありがたく受けて使用していた。(6) ・ 「五賢堂」という祠があり追放中の榑橋がここで坐禅を組んで無の境地に遊んだことは彼のさまざまの文中にも書かれている。…東都をはなれて滄浪閣に引籠っているが、心の安住をこの五賢堂の中に見出そうとして、毎朝板張りの上に坐り無の世界への旅を試みているが、雑念が湧き、救われるべきときもない気持がする。(6) ・ 滄浪閣での榑橋の生活は、広い邸内の松林をそぞろ歩きなどするだけの、文字どおり隠棲の形であったが、それでも持ち前の社交性は失われることなく、折りにふれては誰彼となく交流した。なかでも隣接の池田成彬邸へはよく訪問した。(6) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ この跡の砂地を開墾してさつま芋三千本ばかり植えた。(6) ・ 書斎からみると、ユーカリの木がひどく揺れて、一群の椋鳥が枝から枝へと振り落されそうな恰好をして飛び回っている。(6)
昭和 23			

昭和 26	民間企業 所有	・宿泊施設として開業 (⑦)	・増築 (⑧)	
昭和 27				・五賢堂が吉田茂邸内へ遷座 (②)
昭和 29				
昭和 35				
平成 4				
平成 7				
平成 19	・バンケットホール増築 (⑧)			
平成 20	事業者 福祉系		・チャペル増築 (⑧)	
平成 30			・宿泊施設の営業終了 (⑦)	
			・大磯町有形文化財に指定 (⑦)	

参考文献・建物の特徴

項目	旧滄浪閣（伊藤邸跡・旧李王家別邸）
参考文献	①「大磯町指定有形文化財指定答申書」(2008)大磯町 ②『伊藤博文近代日本を創った男』(2009)伊藤之雄・講談社 ③『藤公餘影』(1910)古谷久綱・民友社 ④『名流談海』(1899)大橋又太郎・博文館 ⑤『滄浪閣の時代：伊藤博文没後100年記念展』(2009)大磯町郷土資料館 ⑥『榎橋渡傳』(1982)榎橋渡伝編集委員会・榎橋渡伝出版会 ⑦『歴史文化資産の保存・活用に資する公園的土地活用に関する調査報告書』(2018.3)国土交通省 ⑧関係工事、建築確認申請図面等、プリンスホテル株式会社提供 ⑨朝日新聞.朝刊3p(1908.12.9)(関東学院大学 水沼淑子教授提供) ⑩『明治期家屋台帳による大磯の初期別荘建築の実態 明治期家屋台帳による大磯の初期別荘建築の実態』水沼淑子(2016)日本建築学会計画系論文集第81巻第720号467-476
建物の特徴	滄浪閣は明治期を代表する政治家伊藤博文の本邸であったが、震災後李親王の別邸として建てられたのが現存するもので、終戦まで滄浪閣の名称は継承された。大正期のモダニズムの雰囲気良く留め、別荘地大磯の代表的建築として貴重な遺構である。(①)

西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸 [凡例]  : 現存する建物

年代	西園寺別邸跡・旧池田邸		
	所有	使われ方	建物・庭の様子
明治 32	別邸 西園寺公望	<ul style="list-style-type: none"> 西園寺公望が別荘を建てた。これは伊藤の紹介だった。陸奥の死後、西園寺は伊藤の最有力の腹心となる。(⑩) 西園寺は陸奥と伊藤の関係を密接にするように努めた。自分の家に伊藤が晩酌にくるから、(陸奥に)偶然のようによそおって来宅しないかという誘いまでしている。・中略・のちの立憲政友会創立につながる政治的人脈はこの頃から形成されつつあった。(②) 原敬との交流(⑧) 	<ul style="list-style-type: none"> 家は、部屋数こそ多くなかったが、今から考えると、かなり広がった。御前様のお居間と呼ばれていたのが祖父の部屋、お部屋様のお部屋というのがおばあちゃんの部屋、それにお客間、お茶の間、玄関脇の詰所、女中部屋、風呂場、台所は土間付きで、駄々ッ広い台所であり、土間には、丈の高い雲雀籠(ひばりかご)や、鶉籠(うずらかご)が吊る下げられていた。……家は茅葺きで、垢抜けのした百姓家とでも言うか(⑩) 庭は狭く、梅の木が数本と、竹の植込み一竹は業平という種類だったと思う。その庭の前から、大磯特有の高い砂山まで続いた松林が、この別荘の生命であり、また、子供たちにとって、楽しい遊び場である。(⑩)
大正 6	池田成彬別邸 ↓ 本邸	<ul style="list-style-type: none"> 西園寺から話を持ち掛けられ隣荘を譲受ける(③) 	<ul style="list-style-type: none"> 関東大震災で麻布本邸を焼失したことを機に曾禰中條設計事務所へ設計を依頼(③) 新築(③) 作品集記載(⑤) 昭和24年：土門拳による撮影。池田成彬、艶夫人、小汀利得が写る(③) 『自分はアメリカで某家に寄宿をしたが、そのとき、庭に朝食室があって、そこで朝飯を食べた。いかにもうらやましかった。時を得たならば、ぜひこれを造りたいと思っていたが、今度はそれが実現したのだ』(③)
大正 12		<ul style="list-style-type: none"> 日本人はもとより遠くアメリカ、イギリスからの訪問客で門前市をなしてはいた。(④) 	
昭和元		<ul style="list-style-type: none"> 吉田茂が池田の家を訪れて政治の相談をした。(③) 	
昭和 5		<ul style="list-style-type: none"> 池田の方が、なにくれとなく忠告を与える立場。池田邸の玄関で主人が吉田に向かって…(①) 散歩が趣味(③) 	
昭和 7		<ul style="list-style-type: none"> 小汀利得、樺山愛輔らとの交流(③) A級戦犯で自宅軟禁。翌年(S21)解除(③) 	
昭和 20		<ul style="list-style-type: none"> 三井の大番頭で、日銀総裁、蔵相、商相などを歴任した池田成彬は、当時戦犯の指定をうけて一種の軟禁状態であったから、裏木戸から自由に入出入りできる滄浪閣へも遊びにきた。池田邸はもと西園寺公望の邸であったが、池田は英国風の地味だがどっしりした、やや暗い建物を建ててもの静かに暮らしていた。(⑦) 	
昭和 27		帝国銀行	
昭和 29	三井銀行	<ul style="list-style-type: none"> 役員寮「大磯荘」として使用(⑨) 	
平成 12	三井銀行	<ul style="list-style-type: none"> 平成 12 年管理人退去(⑨) 	
平成 30	三井銀行		

参考文献・建物の特徴

項目	西園寺別邸跡・旧池田邸
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ①『日本の建築「明治・大正・昭和」』(1979~)企画・編集 村松貞次郎 写真 増田彰久・三省堂 ②『西園寺公望最後の元老』(2003)岩井忠熊・岩波新書 ③『池田成彬伝』(1962)池田成彬伝記刊行会 編・慶応通信 ④『私の人生観』(1951)池田成彬・文芸春秋新社 ⑤『滄浪閣の時代：伊藤博文没後 100 年記念展』(2009)大磯町郷土資料館 ⑥『曾禰達蔵・中條精一郎建築事務所作品集』(1939)中條建築事務所事務所 編・中條建築事務所 ⑦『檜橋渡傳』(1982)檜橋渡伝編集委員会・檜橋渡伝出版会 ⑧『原敬日記 第 1 巻』(1965)福村出版 ⑨三井銀行提供資料 ⑩立命館 史資料センター、<懐かしの立命館>西園寺公望公とその住まい 前編 < http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=100 ⑪『伊藤博文近代日本を創った男』(2009)伊藤之雄・講談社
建物の特徴	<ul style="list-style-type: none"> チューダー調英国風の室内意匠、泰西名画、そのなかで営まれる西欧式の生活、ここには市民たちが懐いた憧憬の或るかたちが見事に実現されている 内外ともに竣工時の姿を良くとどめている(①)

旧大隈重信別邸・旧古河別邸 [凡例]  : 現存する建物

年代	旧大隈別邸・旧古河別邸		
	所有	使われ方	建物・庭の様子
明治 30	別大隈重信	<ul style="list-style-type: none"> ・松の苗木を大量に購入し、敷地に植樹 (⑤) ・大隈重信：16畳の「富士の間」と隣の10畳間をつなげてよく大宴会を開いた。(②) 	<ul style="list-style-type: none"> ・主屋東側の浴室棟付加、同じく北西座敷棟の大規模な改修が行われた。(①) ・テロで片足をなくした大隈の体に配慮して暖炉が供えられている。(③) ・東側の居宅は神代杉をふんだんに使っていることから神代の間と呼ばれ、大隈重信の書斎となっていた。(②)
明治 32			
明治 34	古河別邸	<ul style="list-style-type: none"> ・市兵衛が購入後、毎夏、家族を連れて避暑した (⑤) ・市兵衛の没後、潤吉 (陸奥の次男)、虎之助、従純に引き継がれる (⑥) ・海で泳いだ (虎之助) (④) 	<ul style="list-style-type: none"> ・西側部分を中心に増改築が行われた様子がうかがえる。(①)
昭和 5			
昭和 21			
昭和 23	古河電気工業(株)	<ul style="list-style-type: none"> ・迎賓館「大磯荘」として利用 (⑧) 	

参考文献・建物の特徴

項目	旧大隈別邸・旧古河別邸
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ①「旧大隈重信大磯別荘の履歴」(2015)水沼淑子・学術講演梗概集 日本建築学会 ②『元勳・財閥の邸宅』(2007)鈴木博之編著・和田久士写真・JTB キャンプックス ③『大隈重信自叙伝』(2018)早稲田大学編・岩波書店 ④明治記念大磯邸園明治 150 年記念公開 展示計画 NHK エンタープライズ (2018) ⑤『大磯地所買入其他諸費踏査他関係書類 (明治 30 年 5 月 3 日~明治 34 年 5 月 16 日)』早稲田大学大学史資料 (関東学院大学 水沼淑子教授提供) ⑥『土地台帳』(明治 23 年 1 月 1 日起点) 大磯町立図書館所蔵 ⑦『大磯町文化財調査報告書 第37集 大磯のすまい(1)』(平成4年3月25日発行/編集・発行 大磯町教育委員会) ⑧『大磯荘』古河電気工業株式会社リーフレット
建物の特徴	明治期に大隈重信が購入した後大隈自身の手によって整備した様相を良く伝えており、さらには、明治期に遡る大磯の別荘建築の遺構としても貴重である。(①)

陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸 [凡例]  : 現存する建物

年代	陸奥別邸跡・旧古河別邸		
	所有	使われ方	建物・庭の様子
明治 27	別邸 陸奥宗光	・病にて療養 (①)	・別荘を建築 (①) ・部屋に好きな朝顔の鉢植を所せましと並べ寝ていても、伊藤を始め政客の往来が絶えなかった。(①)
明治 29		・山県有朋、伊藤博文、原敬、西園寺公望との交流 (②) ・腹心の原敬などがしきりに陸奥邸を訪問した。(①) ・陸奥に代わって大臣を務めた西園寺公望との交流があった。 ・「蹇蹇録」を口述筆記で仕上げた (①) ・松林の中で家人らと憩う (⑥)	
明治 30 明治 34		陸奥別邸 ・原敬は宗光死後も古河家と交流を持った。(②) ・市兵衛は毎年夏、家族を連れて避暑した。(②) ・市兵衛の没後、古河潤吉(陸奥の次男)が病氣療養のために使用 (⑥)	
明治 37 明治 42 大正 6 大正 10 大正 12	古河別邸	・潤吉から虎之助、從純に引き継がれる (⑦) ・避暑避暑の別荘として虎之助の母が使用 (②) ・庭でバラの苗木を育て、それを本邸に運んだ (⑤)	・庭にバラ園を整備 (⑤) ・関東大震災で大破 (⑨) ・原型の一部を残すように改築 (元の建物は足尾銅山の柏木平へ移築) (⑨)
大正 13		・「聴漁荘」と名付けられる ・土俵をつくり、力士たちを引き連れて来ては相撲を楽しんでいた(虎之助) (⑤)	
昭和 20		・戦後、虎之助夫人が居住 (②)	
昭和 21			
昭和 31		古河電気工業(株) ・迎賓館「大磯荘」として 利用 (⑨)	

参考文献・建物の特徴

項目	陸奥別邸跡・旧古河別邸
参考文献	①『陸奥宗光』(1985)中野武・関西図書出版 ②『伊藤博文近代日本を創った男』(2015)伊藤之雄・講談社 ③「明治大正期における大磯町東小磯の別荘建築－別荘地化の様相と古河家・赤星家の別荘建築－」(2012)水沼淑子・学術講演梗概集 日本建築学会 ④『原敬日記 第1巻』(1965)福村出版 ⑤明治記念大磯邸園明治150年記念公開 展示計画 NHKエンタープライズ (2018) ⑥古河潤吉君傳(1926)古河 潤吉 and 五日会・五日會 ⑦『土地台帳』(明治23年1月1日起点)大磯町立図書館所蔵 ⑧『大磯町文化財調査報告書 第37集 大磯のすまい(1)』(平成4年3月25日発行/編集・発行 大磯町教育委員会) ⑨『大磯荘』古河電気工業株式会社リーフレット
建物の特徴	数寄屋造りの建物で、大正 13 年の改築以後、当時の姿を良くとどめている。※詳細は建物の調査が必要